

# 教員養成課程における選択必修科目『初等体育』の意義

糸岡 夕里, 日野 克博, 田中 雅人  
石井 浩一, 福田 隆, 上田 敏子

愛媛大学教育学部

## The Significance of "Elementary Physical Education" of Requirements in The School Teacher Training Course

Yuri ITOOKA, Katsuhiko HINO, Masato TANAKA  
Hirokazu ISHII, Takashi FUKUDA, Toshiko UEDA

Ehime University, Faculty of Education

### 1. はじめに

平成9年, 教育職員養成審議会答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」を契機に, 教員に求められる資質・能力や教員養成カリキュラムの改善といった議論が展開されてきたが, 教員養成段階において, どのような力量を育成すべきなのか, 明確な指標が示されることはなかった。平成27年, 中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」において, 大学が教職課程を編成するにあたり参考とする指針(教職課程コアカリキュラム)を関係者が共同で作成することで, 教員養成の全国的な水準の確保を行っていくことが必要であることが提言されたことを踏まえ, 教職課程で共通的に身につけるべき最低限の学修内容について検討することを目的として, 教職コアカリキュラムの在り方に関する検討会が設置された。そうして平成29年, 「教職課程コアカリキュラム(案)(教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 2017)」が示されるに至った。しかしながら, このコアカリキュラムにおいて, 「教科に関する科目」については, 十分な指針が示されておらず, 今後順次整備されることが期待されている(教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 2017 p. 2)。

一方, 国立教育政策研究所は, 平成27年「教員養成等の改善に関する調査研究(全体版)報告書」をまとめ, 現代の教育を遂行する教員に必要とする資質・能力の構成要素

として, 五つの領域(A:資質・能力, B1:教職に関する知識・理解, B2:教科に関する知識・理解, C:実践力, D:研究力)に整理した。「B2:教科に関する知識・理解」の項目についてみていくと「B2-1:各教科等の指導内容の教育的価値を人間形成の側面から理解している」「B2-2:各教科等の指導内容に関する系統的な知識, 技能を持っている」「B2-3:各教科等の目標, 教材, 指導方法, 学習評価についての知識を持っている」の3項目が示されている。

ここで教育職員免許法に目を向けると, 教育職員免許法を取得するためには, 教育職員免許法等で規定された科目「教職に関する科目」「教科に関する科目」「教科又は教職に関する科目」の3つに区分された科目において必要な単位を修得しなければならない。本研究の対象とした『初等体育』は, 「教科に関する科目」に位置付いており, 当該科目において大学において修得することを必要とする最低単位数は8単位と規定されている。「教科に関する科目」とは, 国語(書写を含む), 社会, 算数, 理科, 生活, 音楽, 図画工作, 家庭および体育の教科に関する科目を意味している。よって1科目2単位と考えると4教科を取得すれば免許取得には問題ないこととなる。「教職に関する科目」の中で, 各教科の指導法については, 全教科が必修となっていることから, 全く学修しない教科はないものの, 国立教育政策研究所(2015)が示した「B2:教科に関する知識・理解」を修得するには限界がある。

そこで本研究では, 本学教育学部2回生を対象に, 体育授業の学習指導について質問紙調査を実施し, 『初等体育』

の受講の有無による差異について、体育授業に対する愛好度および体育授業を指導する際の心配度という観点から検討することにより、その意義を明らかにすることを目的とした。

## 2. 方法

### (1) 『初等体育』の位置づけおよび概要

『初等体育』は、「教科に関する科目」に位置付いており、当該科目において大学において修得することを必要とする最低単位数は8単位と規定されている。愛媛大学教育学部では、上記の教科の中から、文系（国語、社会、生活）、理系（算数、理科、家庭）、芸体系（音楽、図画工作、体育）と教科が偏ることがないように各系から最低1科目2単位を選択することとしている。

### (2) 『初等体育』の概要

『初等体育』は愛媛大学教育学部では、2回生の前期に開講している科目であり、目的、到達目標については、以下の通りであった。受講者数の関係から、前半、後半とグループを分割して複数の教員により指導しており、内容の詳細はグループにより多少異なるものの、『初等体育』の目的や到達目標、核となる指導内容は担当教員間において共通理解を図り実施した。

#### 【目的】

『初等体育』では、小学校体育で取り扱われる体づくり運動、器械運動、陸上運動、ボール運動について、実技を通して基本的技能を身につけるとともに、学習指導の方法や安全管理について理解することが目的である。

#### 【到達目標】

- ①体育授業に対して興味・関心を持ち、各運動領域の特性を説明できる
- ②各運動種目の技術やルールに関する内容を具体的に説明できる
- ③小学校体育の技能、態度、思考・判断に関する学習指導の方法を身につける

#### 【授業内容】

表1は、『初等体育』の授業内容について示した。初回は、授業のガイダンスを全体で行い、授業の目的や内容、今後のスケジュール等について指導した。2回目から8回目までの前半7回は2グループに分割し、体づくり運動、器械運動、陸上運動のといった個人種目の内容について、9回目から15回目までの後半7回は3グループに分割し、ゲーム、ボール運動といった集団種目の内容について指導した。なお、( ) 内には、そのグループの授業担当者について

記載した。

表1 『初等体育』の授業内容

回	内 容		
①	ガイダンス		
② から ⑧	*前半A*  体づくり運動 器械運動 陸上運動 (日野・上田)	*前半B*  体づくり運動 器械運動 陸上運動 (糸岡)	
⑨ から ⑮	*後半1*  ゲーム ボール運動 (田中)	*後半2*  ゲーム ボール運動 (石井)	*後半3*  ゲーム ボール運動 (福田)

### (3) 質問紙調査の実施および分析

質問紙調査の内容は、体育授業に対する愛好度（2項目）と体育授業を指導する際の心配度(18項目)についてであった。

体育授業に対する愛好度については、「Q1. あなたは体育授業が好きですか」「Q2. あなたは運動するのが得意な方だと思いますか」という質問項目を設定した。「Q1. あなたは体育授業が好きですか」については、「大嫌い」「嫌い」「どちらでもない」「好き」「大好き」の5件法により回答を求め、順に1点から5点として得点化した。「Q2. あなたは運動するのが得意な方だと思いますか」については、「全く思わない」「あまり思わない」「どちらともいえない」「やや思う」「強く思う」の5件法により回答を求め、順に1点から5点として得点化した。

体育授業を指導する際の心配度については、「Q3. あなたが小学校で体育の授業をすると考えたとき、あなたは次のことについて、今どれほど心配に思っていますか」（日野・刈谷 2006）という設問において18の質問項目（表2）を設定し、回答は、「全く心配ない」「あまり心配ない」「どちらともいえない」「やや心配だ」「非常に心配だ」の5件法とし、順に1点から5点として得点化した。

質問紙調査は、『初等体育』の授業と同様に2回生の前期に開講しており、小学校一種免許状を取得するためには必修の科目である『初等体育科教育法』の授業の最後の回に実施した。『初等体育科教育法』の受講生には、『初等体育』を受講している学生とそうでない学生がいるため、両者間の差について検討することとした（t検定）。

なお、調査は2016年、2017年の2回実施した。いずれも授業内に実施し回収したため回収率は100%であった。

表2 Q3の調査項目(日野・刈谷 2006)

1	子どもが安全に運動できる
2	運動の苦手な子どもへの配慮ができる
3	どの運動を教えるべきかを理解している
4	学校の体育にかかわる行事予定を理解している
5	子どもが私の授業を好意的に評価してくれる
6	自分が模範を示せない種目の運動を教える
7	授業中に一人一人の子どもを把握できる
8	子どもの行動をコントロールできる
9	今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう
10	子どもたちの運動のつまづきを診断できる
11	体育用具の準備や体育施設の管理ができる
12	教師に認められ受け入れられる
13	各種目に必要な運動技能を指導できる
14	子ども同士の協力的な関係をつくる
15	学校の教員の前でうまく行動する
16	運動技能を向上させる指導ができる
17	いろいろな子どもたちのニーズに合わせる
18	よい体育授業ができる

(4) 倫理的配慮

調査を実施するにあたり、質問紙の冒頭に「この調査は、教員養成カリキュラムにおける授業内容の改善のために必要な資料を得るために行うものです。成績評価とは全く関係ありません。率直な意見を記入して下さい」といった内容を明記し、研究協力の同意を得た。くわえて調査対象者へ対し、研究への参加は任意であり、『初等体育科教育法』『初等体育』の授業はもとより、他の科目を含め単位認定および成績評価には一切関係がないこと、研究の不参加による不利益がないこと、研究参加への中止を研究者に対していつでも通告できること、データの管理を厳重に行うこ

と、学会や論文等で研究成果を公表すること、またその際、個人を特定することはないことを口頭で説明した。

3. 結果および考察

『初等体育』の意義を検討するにあたり、質問紙調査を実施した結果、以下のことが明らかとなった。

表3は、調査対象者の内訳について示した。2016年と比較して2017年の『初等体育』の受講者数が大幅に増加した。これは、2016年は学校教育教員養成課程100名、特別支援教育教員養成課程20名を受講対象としていたが、2017年は学校教育教員養成課程140名、特別支援教育教員養成課程20名と学校教育教員養成課程の定員が40名増となり、教育学部全体で教員養成に特化したことに起因していると推察できた。

表3 調査対象者の内訳

初等体育	2016年	2017年
受講者	62	101
未受講者	57	43

(1) 体育授業に対する愛好度

体育授業に対する愛好度について、『初等体育』の受講の有無による差異を検討するため、t検定を行った。図1は、体育授業に対する愛好度についての平均値について、表4は体育授業に対する愛好度についての平均値、標準偏差、t検定の結果について示した。

t検定の結果、「Q1. あなたは体育授業が好きですか」(2016年:  $t = 2.95, p < .01$ , 2017年:  $t = 5.10, p < .01$ )「Q2. あなたは運動するのが得意な方だと思いますか」(2016年:  $t = 2.77, p < .01$ , 2017年:  $t = 3.65, p < .01$ )という各質問項目において2016年、2017年ともに『初等体育』の受講生は、未受講生と比較して有意に高い結果であった。これより、『初等体育』の未受講生より受講生の方が、体育授業を好きだと思っていると同時に、運動を得意だと思っていることが確認できた。

『初等体育』は選択必修科目として位置付いていることから、体育授業があまり好きでなかったり、運動を苦手と感じていたりする学生ほど『初等体育』を受講していない可能性が示唆された。

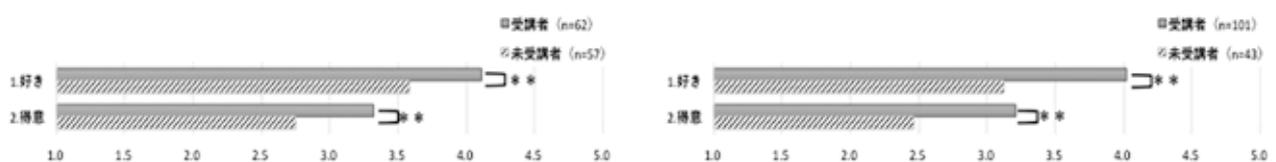


図1 体育授業に対する愛好度についての平均値(左図:2016年,右図:2017年)

表4 体育授業に対する愛好度についての平均値・標準偏差・t検定

	2016年					2017年				
	受講者 (n=62)		未受講者 (n=57)		t 値	受講者 (n=101)		未受講者 (n=43)		t 値
	M	(SD)	M	(SD)		M	(SD)	M	(SD)	
1. 好き	4.11	(0.95)	3.58	(1.00)	2.95**	4.02	(0.82)	3.12	(1.25)	5.10**
2. 得意	3.32	(1.34)	2.75	(1.15)	2.77**	3.21	(1.17)	2.47	(1.45)	3.65**

\* : p<.05, \*\* : p<.01

小学校教諭は学級担任が全教科を担うことが基本であることから、体育授業に対してネガティブな思いがある学生や運動を苦手としている学生ほど『初等体育』を受講することが望ましいが、現状のカリキュラムでは困難であることがうかがえた。

(2) 体育授業を指導する際の心配度

『初等体育』の意義を検討するにあたり、日野・刈谷(2006)が作成した体育授業を教えることへの心配に関する質問項目を使用し、『初等体育』の受講の有無による差異についてt検定を行った。図2は、体育授業を指導する際の心配度の平均値について、表5は、体育授業を指導する際の心配度についての平均値、標準偏差、t検定について示した。

体育授業を指導する際の心配度が最も高かった項目は、2016年の受講生、2017年の受講生、未受講生において「6. 自分が模範を示せない種目の運動を教える」であり、2016

年の未受講生においては、最も心配度が高かった項目は「6. 自分が模範を示せない種目の運動を教える」ではなかったものの非常に高い値を示した。

これは、日野・刈谷(2006)が教育実習前に教育実習生に対して行った同様の調査においても、同様の結果であった。これより、教員養成段階における学生が体育授業を指導する際、自分が模範を示せない種目の運動を教えることを非常に強く心配していることが推察できた。

体育授業を指導する際の心配度について、『初等体育』の受講の有無によるt検定の結果、2016年では「9. 今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう」(t = 2.60, p <.01)「16. 運動技能を向上させる指導ができる」(t = 2.28, p <.01)「17. いろいろな子どもたちのニーズに合わせる」(t = 2.69, p <.01)「18. よい授業ができる」(t = 1.76, p <.05)の4項目において、『初等体育』の受講生の方が未受講生より有意に低かった。2017年では、「7.

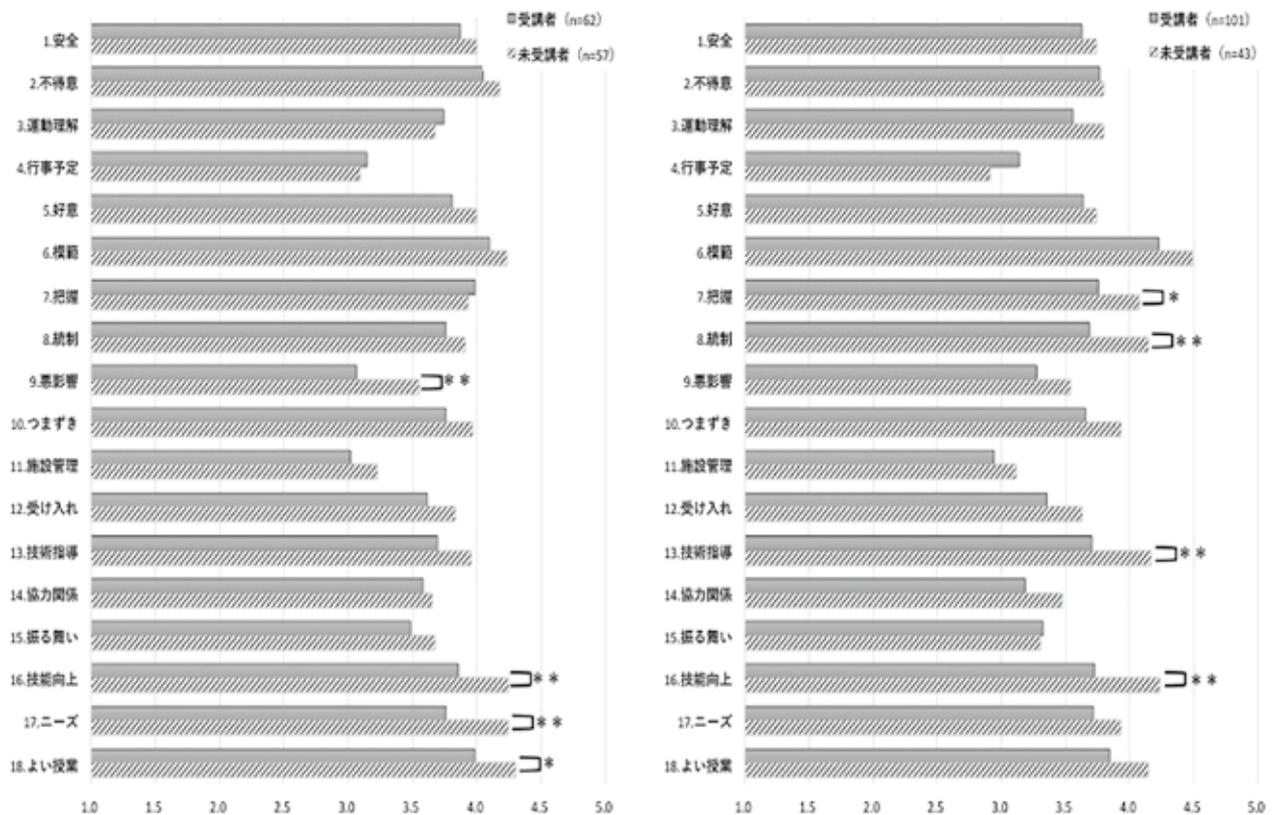


図2 体育授業を指導する際の心配度の平均値 (左図：2016年, 右図：2017年)

表5 体育授業を指導する際の心配度についての平均値・標準偏差・t検定

	2016年					2017年				
	受講者 (n=62)		未受講者 (n=57)		t 値	受講者 (n=101)		未受講者 (n=43)		t 値
	M	(SD)	M	(SD)		M	(SD)	M	(SD)	
1. 安全	3.87	(0.97)	4.00	(0.87)	0.76	3.63	(0.98)	3.74	(1.07)	0.49
2. 不得意	4.05	(1.08)	4.18	(0.63)	0.78	3.79	(0.98)	3.79	(1.08)	0.05
3. 運動理解	3.74	(0.92)	3.67	(0.87)	-0.46	3.56	(0.92)	3.79	(1.06)	1.18
4. 行事予定	3.15	(1.14)	3.09	(1.01)	-0.29	3.14	(1.00)	2.91	(1.00)	-1.27
5. 好意	3.81	(1.08)	4.00	(0.78)	1.11	3.64	(1.06)	3.74	(1.09)	0.57
6. 模範	4.10	(1.02)	4.23	(0.85)	0.76	4.23	(0.97)	4.49	(1.08)	1.37
7. 把握	3.98	(0.98)	3.93	(0.82)	-0.32	3.75	(1.05)	4.07	(0.77)	1.78 *
8. 統制	3.76	(1.13)	3.91	(0.79)	0.86	3.69	(1.05)	4.14	(0.77)	2.45 **
9. 悪影響	3.06	(1.05)	3.54	(0.95)	2.60 **	3.27	(1.06)	3.53	(0.93)	1.38
10. つまづき	3.76	(1.07)	3.96	(0.87)	1.16	3.66	(1.00)	3.93	(0.88)	1.57
11. 施設管理	3.02	(1.15)	3.23	(0.98)	1.08	2.94	(1.14)	3.12	(1.07)	0.81
12. 受け入れ	3.61	(1.11)	3.82	(0.89)	1.14	3.35	(1.11)	3.63	(1.13)	1.38
13. 技術指導	3.69	(1.02)	3.95	(0.77)	1.53	3.71	(1.05)	4.16	(1.04)	2.35 **
14. 協力関係	3.58	(1.09)	3.65	(1.01)	0.35	3.19	(1.05)	3.47	(1.12)	1.52
15. 振る舞い	3.48	(0.94)	3.67	(0.83)	1.12	3.32	(1.09)	3.30	(1.15)	-0.17
16. 技能向上	3.85	(1.11)	4.25	(0.69)	2.28 **	3.73	(1.10)	4.23	(0.65)	2.77 **
17. ニーズ	3.76	(1.14)	4.25	(0.79)	2.69 **	3.72	(1.05)	3.93	(0.94)	1.17
18. よい授業	3.98	(1.11)	4.30	(0.80)	1.76 *	3.84	(1.11)	4.14	(0.77)	1.49

\* : p < .05, \*\* : p < .01

授業中に一人一人の子どもを把握できる」(t = 1.78, p < .05)「8. 子どもの行動をコントロールできる」(t = 2.45, p < .01)「13. 各種目に必要な運動技能を指導できる」(t = 2.35, p < .01)「16. 運動技能を向上させる指導ができる」(t = 2.77, p < .01)の4項目において、『初等体育』の受講生の方が未受講生より有意に低かった。

2016年のt検定の結果より、「9. 今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう」「16. 運動技能を向上させる指導ができる」「17. いろいろな子どもたちのニーズに合わせる」「18. よい体育授業ができる」の4項目において、『初等体育』の未受講生より受講生の方が、心配度が低いことが確認できた。また、2017年のt検定の結果より「7. 授業中に一人一人の子どもを把握できる」「8. 子どもの行動をコントロールできる」「13. 各種目に必要な運動技能を指導できる」「16. 運動技能を向上させる指導ができる」の4項目において、『初等体育』の未受講生より受講生の方が、心配度が低いことが確認できた。

2016年、2017年ともに『初等体育』の未受講生より受講生の方が有意に低かった項目は「16. 運動技能を向上させる指導ができる」であった。体育授業では、あくまで技能が中核となることから、運動技能を向上させる指導ができるという項目において、心配度が有意に低い結果であったことは、『初等体育』の到達目標の1つである「小学校体育の技能、態度、思考・判断に関する学習指導の方法を身につける」ことが達成できた結果であり、大きな成果と言える。なお、日野・刈谷(2006)が教育実習前後を対象として同様の調査を行った結果、「16. 運動技能を向上させる指導ができる」の項目は有意差がみられなかった。このことから、運動技能を向上させる指導については、教育

実習期間中に身に付けることは難しく、『初等体育』で身に付けておく重要性が示唆された。

#### 4. ま と め

本研究では、教員養成段階における『初等体育』の意義を検討するにあたり、体育授業に対する愛好度および体育授業を指導する際の心配度について『初等体育』の受講の有無による差異をt検定により検討した。その結果、以下の2点が明らかとなった。

①『初等体育』の未受講生より受講生の方が、有意に体育授業を好きだと思っている(2016年: t = 2.95, p < .01, 2017年: t = 5.10, p < .01)と同時に、運動を得意だと思っている(2016年: t = 2.77, p < .01, 2017年: t = 3.65, p < .01)ことが確認できた。

②2016年、2017年と共通して『初等体育』の未受講生より受講生の方が有意に低かった体育授業を指導する際の心配度についての項目は、「16. 運動技能を向上させる指導ができる」(2016年: t = 2.28, p < .01, 2017年: t = 2.77, p < .01)であった。体育授業では、あくまで技能が中核となることから、運動技能を向上させる指導ができるという項目において、心配度が有意に低い結果であったことは、『初等体育』の到達目標の1つである「小学校体育の技能、態度、思考・判断に関する学習指導の方法を身につける」ことが達成できた結果であり、大きな成果と言える。

『初等体育』の受講生より未受講生の方が、体育授業に対してネガティブな思いがあり、運動を苦手としていることがうかがえた。本来であれば、そういった学生ほど『初等体育』を受講し、体育授業に対してポジティブな思いを

もつとともに、一定の指導力を身に付けることが期待されるが、現状のカリキュラムでは困難であることが推察できた。

本研究では『初等体育』の意義を検討するにあたり、『初等体育』の授業終了後、体育授業に対する愛好度および体育授業を指導する際の心配度について、受講者と未受講者との差異を検討したに過ぎない。今後は『初等体育』受講前後における愛好度および心配度の変容について検討することや、実際の指導力が身についたかどうかについて検討することが課題である。また、小学校学習指導要領（文部科学省，2017）の体育科には、『初等体育』で指導していない内容（領域）として、水泳、表現運動があるため、これらの内容をどう補完していくのかが今後の課題である。

## 文 献

- 中央教育審議会答申（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」
- 日野克博・刈谷三郎（2006）「第1節 質問紙調査による教育実習生の意識の実態把握」、『実践的力量を形成する体育教師教育プログラム開発のための実証的研究』，平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書（研究課題番号15300214）．研究代表者：木原誠一郎，119-132
- 国立教育政策研究所（2015）「教員養成等の改善に関する調査研究（全体版）報告書」
- 教育職員養成審議会答申（1997）「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」
- 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（2017）「教職課程コアカリキュラム（案）」
- 文部科学省（2008）小学校学習指導要領．東京書籍
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領．[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afldfile/2017/05/12/1384661\\_4\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf)（2017.10.16）